

式 辞

本日、東京農工大学連合農学研究科へ新たに迎えることができました新入生は五六名です。伝統ある連合農学研究科の一員になられた皆さん、入学おめでとうございます。また、これまで側面から皆さんを支え、この日を待ちわびてこられたご家族の皆様をはじめとした関係各位のお喜びもひとしおと思います。心よりお祝い申し上げます。

本日は、本連合農学研究科を構成する茨城大学学長池田幸雄先生、および宇都宮大学学長進村武男先生、連合農学研究科長である千賀裕太郎先生をはじめ、各構成大学の理事・副学長、農学部長等関係の方々のご臨席を頂いております。我々一同、新入生の皆様を心より歓迎いたします。

新入生五六名の中には、アジアおよびアフリカの七ヶ国からの留学生十七名が含まれております。大変国際色豊かな研究科です。留学生の皆さん、言葉も習慣も異なる日本における生活は、何かと苦労も多いかと思いますが、一日も早く日本での生活に慣れ、研究に専念していただきたいと思います。併せて、日本文化についても造詣を深め、皆さんの母国と日本とをより一層強い絆で結ぶ架け橋となっていきたいと思います。

現在、人類は地球環境の破壊、人口の急増、資源の枯渇など、かつてないほどの危機に直面しております。地球上の生物が共存できる環境の維持、安全な食料の確保、暮らしを支える資源の確保、健康な生活の維持は、われわれの「いのちと暮らし」を支えるために必要不可欠です。農学はこれらの問題解決に繋がる重要な学問分野として位置づけられており、まさに「いのちと暮らし」の総合科学です。二十一世紀は農学の時代といっても過言ではなく、いのちと暮らしを守る科学技術の進展と、その分野を担う人材養成は極めて重要であります。東京農工大学連合農学研究科は、このような時代的・社会的要請を受け、茨城大学、宇都宮大学、それに東京農工大学の三大学が協力して一九八五年四月に設立したもので、三大学にまたがる多様性に富んだ多数の教員から教育研究指導を受けられることを最大の特色としております。既に二十四年の歴史を持ちますが、この間、二十一世紀が抱える課題の解決のための日本およびアジアでの中核的な研究推進および研究者養成のための博士課程大学院として発展してまいりました。現在では農学分野における教育と研究の中核的機関として、その地位を不動のものとしております。

さて、皆さんのこれからの本研究科における研究生活を稔り多いものにするために、皆さんに以下のことを期待したいと思います。

入学された皆さんは、農学分野において指導的立場の研究者へと成長して行くことが期待されますが、それに至るプロセスの中で、本研究科における大学院生活が極めて重要な意味を持つことを、ここで改めて考えていただきたいということです。大学は最高学府と言われ、知の宝庫です。皆さんが選んだ専門分野における高度研究者になるのに必須の知識体系と育成の枠組みが用意されており、優れた教員が皆さんをサポートしてくれます。知識基盤社会といわれるこれからの高度化した社会において、世界の第一線で堂々と活躍

できる研究者を育成する体制が用意されております。それを皆さんが十分に活用できるかどうかは皆さん自身の心構えにかかっているといつてよいでしょう。皆さんは大学院の学生ですから、全ての点で自ら進んで考え、調べ、行動することが求められます。教員から与えられることを待つのではなく、自ら求めて下さい。求めれば、それに応えられるのが本研究科です。積極的で自立的な大学院生活は、皆さんのこれからを決定づけるほどに重要であることを肝に銘じて下さい。

次に、このように重要なこれからの三年間の大学院生活においては、高い目標を掲げ、それに向かって日々努力してほしいということです。これこそ皆さんを成功に導く鍵なのです。ちょっとした実験の失敗が大きな発見につながり、偶然ともいえる思いつきが偉大なブレークスルーのきっかけになることがあります。ノーベル賞に結びつく偉大な研究成果が、そのようなことが糸口になったというエピソードはたくさんあることを皆さんよくご存知でしょう。しかし、それは単なる偶然とか幸運による結果なのではありません。日々の大変な努力の裏付けによる成果なのです。細菌学者であるパスツールは「ひらめきは、それを得ようと長い間、準備・苦心した者だけに与えられる」といつております。「天才とは1パーセントのひらめきと99パーセントの努力から成る」といつのはエジソンの言葉として有名ですが、まさに「継続は力なり」です。日頃の大変な努力があればこそ、ほんの僅かな兆候が重要なひらめきに結びつくわけです。皆さんには是非大きな研究目標を掲げて日々の地道な努力を行い、その過程で見つけた小さな「芽」を見逃さず、それを大きな茎に育てていただきたいと願つております。その先には大輪の花が待ち受けていることでしょう。自らの専門分野においては誰にも負けない、というスペシャリストを目指して思いきり研究に没頭して下さい。それにより自らのしっかりとした専門分野をまず確立して欲しいと思います。これからの三年間はその意味でも重要です。

一方、広く学ぶ、ということも重要です。先ほども触れましたが、農学は総合科学であり、広い分野を包含する複合体であるといえます。狭い専門的知識や技術のみでは対処できない問題を扱うのが農学であるといつてよいでしょう。幅広い教養と総合的な判断力が要求されるわけです。したがって、皆さんには自らの専門領域を越えて広く学び、科学技術全体の流れの中で、自らの専門分野を的確に位置づけるようになっていただきたいと思つます。しかし、全体を見通した総合的な判断力は簡単に短期間で獲得できるものではありませんが、そのような能力を育てていくための基盤を是非大学にいる間に作つて下さい。皆さんが所属する本連合農学研究科の持つ利点がここで生きることになります。三つの大学には非常に多数の教員が所属しており、極めて多様な研究が行われております。しかもこれらが大学の枠を越え且つ専門の領域をも越えて連携し協力しあう関係ができております。これは他に無い本研究科の優れたところです。皆さんは皆さんの研究テーマに最もふさわしい教員のもとで研究を進めるわけですが、最近の研究は分野間の融合化が進み、広い専門分野の知識を要求されるものが増えてきております。そのような状況でも、本研究科は幅広い研究者集団から構成されておりますので、主指導教官以外でも皆さんに適切な指導・助言ができる教員が見付かるはずであり、教員は喜んで皆さんの相談にのつてくれるでしょう。これが本研究科の特色でもあります。皆さんがこの特色ある制度を有

効に活用して、異なる分野の研究者と大いに議論し、総合的な判断力をできるだけ身につけるように心がけていただきたいと思います。このような開かれた環境が大学の大きな特色であり、一般社会ではなかなか存在するものではありません。このような恵まれた環境を自らの成長の糧にして、世界の一線で活躍できる研究者に成長して行っていただきたいと思います。

以上、連合農学研究科の大学院生としての生活のスタートにあたって、それが実り多いものになることを願い、私の期待したいことを述べてみました。皆さんの主体性こそ基本であり、我々は努力する皆さんを強力にサポート致します。皆さんにはそれぞれの大きな目標に向かって研究が順調に進展し、三年後には大きく実を結ぶことを期待いたしまして、式辞といたします。

平成二十一年四月一四日

東京農工大学長 小畑 秀文